

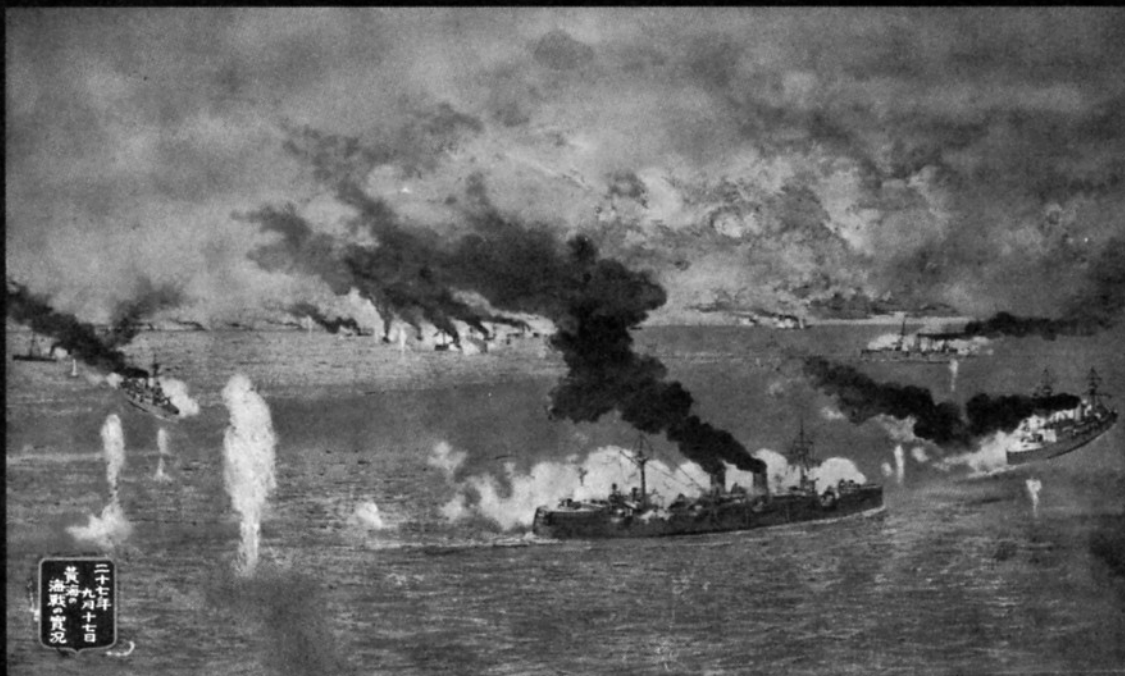
黄海海戦

その戦闘経過をたどる

BATTLE OF THE YALU 27 SEPT. 1894

by Koichi Takasu

高須 廣一 (元海将補)



「黄海の海戦の實況」とタイトルの付けられた絵画。画面手前に描かれているのは第1遊撃隊の各艦である。

今から100年前の明治27年、日清戦争が起こり、その9月17日に黄海の北部でわが連合艦隊と清国の北洋艦隊の間で海戦が演じられた。

1860年に甲鉄艦が出現して以来、造船、造兵、製鋼術の進歩は目覚ましく、帆と絶縁して汽走専用になり、前装砲は廃れ、中口径砲には速射砲が出現、最初の鍊鉄で保護した文字どおりの甲鉄艦 (Ironclad) は装鋼甲鉄艦ないし装甲艦 (Armored Ship) に脱皮しつつあった。

先進海軍国では、帆走時代の戦列艦に代わって海戦の主力たりうる艦型を求めて試行錯誤を続けたが、適合性を実証しうる海戦が1866年のリッサ海戦以後起こらず、新艦型による最適の戦術も確立されなかった。

このような時機に起こったのが日清戦争であり、その黄海海戦は各国海軍の注目を浴びることになった。

黄海海戦までの両国艦隊

日清戦争は豊島海戦と陸上の牙山・成歓の戦を経て8月1日に宣戦が布告されて始まった。

連合艦隊に課せられた任務は早急に北洋艦隊を撃破し

て黄海、渤海の制海権を確保し、陸軍を直隸平野に安全に上陸させることであったが、会敵の機会に恵まれず、8月15日からは船団護衛も任務に加えられた。

連合艦隊司令長官伊東祐亨中将は、当時連合艦隊を本隊、第1～3遊撃隊と水雷艇隊に区分していた。

9月12日第1軍後続部隊の船団が連合艦隊護衛の下に仁川に着き、第2遊撃隊以下が船団の港内への誘導や艦載艇による上陸の直接支援を行ない、本隊と第1遊撃隊はカロリン (加露林) 湾外で北洋艦隊に備えた。

陸軍先遣隊がその頃独断で平壤攻略戦を発動し、連合艦隊に陸軍応援の任務が与えられた。伊東長官は仁川上陸が終わり次第、全艦艇を率いて大同江口へ進出しようとした。

ちょうど樺山資紀軍令部長が大本營の海軍参謀官として戦況の視察に来ていた。軍令部長が戦地に赴いたのは、陸軍の長老山県有朋が第1軍司令官になったのに対応したものといわれるが、慎重に過ぎる伊東長官を督励する含みもあったようだ。

樺山参謀官は、敵艦隊は陸軍応援のため大同江方面に

出動して仁川には来襲するまいと考え、13日に所在艦艇だけで大同江口に向かうことを伊東長官に協議した。

この日の朝、第1游撃隊の2隻が威海衛を偵察したが、敵影を見なかった。北洋艦隊司令丁汝昌提督は北朝鮮増援部隊の船団護衛の命を受けて12日威海衛を発ち、13日は旅順に入港していたのである。

14日朝その報告を受けた伊東長官は第2游撃隊などに上陸が終わり次第大同江口へ向かうことを命じ、午後4時頃所在艦艇を率いて出発した。

一方、丁司令に日本の巡洋艦2隻が威海衛沖に現れたとの電報が届いたので、北洋艦隊は13日午後3時出港、山東半島の突端へ向かった。14日にはドイツの弾薬輸送船が威海衛に入港する予定であり、日本側が同船を捕獲するために出動したと察したからである。

14日の夜になっても異状を認めなかったので引き返し、15日午前大連湾に着いた。銘軍8営の兵は旅順に続いて大連湾で招商局の汽船5隻に乗り込みつつあった。

そこへ天津と義州から同時に電報が入って平壤情勢の緊迫を知り、船団は発航の準備を急ぐことになった。

同じ15日の朝、連合艦隊主力は長山串北東の錨地に着いた。大同江口一帯に敵影が見えないので、樺山参謀官はそれまでに得た情報を総合し、敵は大鹿島方面にいるのではないかと考え、空しく長山串沖に停泊すべきではないと伊東長官に助言した。

伊東長官は第2游撃隊などの来着後、総艦艇で索敵巡航の途に上るつもりであったが、再度決心を改め、それを待たずに16日午後5時長山串の仮根拠地を出発した。

この時第1游撃隊が順番号の単縦陣で先頭に立ち、その後方に本隊が単縦陣を取って航海速度8ノットで進み、列外の右後部に赤城と西京丸が続いた。

この出動は10年後の日本海海戦における加徳水道の出撃と異なり索敵巡航であったから、浅海域偵察のため砲艦の赤城を伴ったのである。また西京丸は樺山参謀官の乗用であった。

第1表 黄海海戦参加艦艇

艦 名			艦 種	常 備 排水量 (t)	速力 (kt)	装甲厚さ		兵 装(門)				艦齡 (年)	被 害			備 考
						水線部 (mm)	防 御 甲板 (mm)	通常 砲	速射 砲	機 砲	発射 管		被弾 (発)	即死 (人)	負傷 (人)	
日 本 艦 隊	本 隊	松 島	海 防 艦	4,278	16.0	—	32.5	1	27	1	4	4	13	35	78	
		千 代 田	甲 鋼 帶 巡 洋 艦	2,439	19.0	86	42.0	—	24	3	3	//	3	—	—	
		嚴 島	海 防 艦	4,278	16.0	—	32.5	1	29	1	4	5	8	13	18	
		橋 立	//	//	//	//	//	//	//	//	3	11	3	10		
		比 叡	鉄 甲 帯 コ ル ベ ッ ト	2,284	13.2	11.4	—	12	—	6	2	17	23	19	37	
		扶 桑	甲 鉄 コ ル ベ ッ ト	3,777	13.0	15.2	—	//	—	9	//	//	8	2	12	
	第 1 游 撃 隊	吉 野	巡 洋 艦	4,216	22.5	—	84.0	—	34	—	5	2	8	1	11	
		高 千 穂	//	3,709	18.0	—	57.0	8	2	14	4	9	5	//	2	
		秋 津 洲	//	3,150	19.0	—	40.0	—	18	4	//	2	4	5	10	
		浪 速	//	3,709	18.0	—	57.0	8	2	14	//	9	9	—	2	
	付 属	赤 城	砲 艦 代 用	622	10.2	—	—	4	6	—	—	6	30	11	17	
		西 京 丸	巡 洋 艦	2,200	14.5	—	—	—	4	—	—	//	12	—	11	
清 国 艦 隊	第 1 隊	定 遠	甲 鉄 砲 塔 艦	7,335	//	383	76.5	10	//	8	3	12	159	17	38	
		鎮 遠	//	//	//	//	//	//	//	//	13	220	13	28		
	第 2 隊	致 遠	巡 洋 艦	2,300	18.0	—	76.0	5	16	4	4	8	?	246	—	沈 没
		靖 遠	//	//	//	//	//	//	//	//	//	110	2	16		
	第 3 隊	経 遠	甲 鉄 砲 塔 艦	2,900	15.5	240	40.0	6	8	—	//	7	?	232	—	沈 没
		来 遠	//	//	//	//	//	//	—	//	//	225	17	13		
	第 4 隊	濟 遠	巡 洋 艦	2,300	15.0	—	22.0	7	11	—	4	11	15	5	10	
		広 甲	コ ル ベ ッ ト	1,296	14.7	—	—	//	4	—	—	7	?	?	?	擱 座
	第 5 隊	超 勇	砲 艦	1,350	15.0	—	—	8	//	6	—	13	?	125	—	沈 没
		揚 威	//	//	//	—	—	//	//	//	—	//	?	57	—	擱 座
	付 属 隊	平 遠	甲 装 砲 艦	2,100	11.0	—	—	3	//	4	1	5	24	—	15	
		広 丙	水 雷 砲 艦	1,000	17.0	—	—	—	7	//	4	3	1	—	3	
鎮 南		砲 艦	440	8.0	—	—	3	—	//	—	13	?	?	?		
鎮 中		//	//	//	—	—	//	—	//	—	//	?	?	?		
福 龍		水 雷 艇	115	23.0	—	—	—	2	—	4	9	?	?	?		
左 隊 1 号		//	108	24.0	—	—	—	//	4	2	7	?	?	?		
右 隊 2 号		//	74	18.0	—	—	—	—	2	//	9	?	?	?		
右 隊 3 号	//	//	//	—	—	—	—	//	//	//	?	?	?			

注) 排水量および速力は竣工当時の値を示す。

第2表 参加艦艇の備砲

一般呼称		口径 (mm)	身長 (mm)	弾丸 重量 (kg)	初速 (m/s)	有効 射程 (m)	日本艦隊		清国艦隊	
							総数 (門)	搭載艦	総数 (門)	搭載艦
通常砲	32姆加砲	320	12,160	450	650	8,000	3	松島, 巖島, 橋立(各1)	—	
	80年式30姆5克砲	305	6,720	329	500	7,800	—		8	定遠, 鎮遠(各4)
	80年式26姆克砲	260	8,320	275	530	12,200	4	高千穂, 浪速(各2)	1	平遠
	前装11尹安砲	279.4	6,480	240.4	554	7,681	—		2	鎮南, 鎮中(各1)
	新式10尹安砲	254	6,542	181.4	560	8,000	—		4	超勇, 揚威(各2)
	80年前式24姆克砲	240	4,511	160	475	5,000	4	扶桑	—	
	80年式21姆克砲	209.3	6,720	140	530	8,300	—		12	致遠, 靖遠(各3), 經遠, 來遠, 濟遠(各2)
	80年前式17姆克砲	172.6	3,780	60	460	5,400	4	比叡, 扶桑(各2)	—	
	6尹後裝安砲	152	身4,800	36.3	?	6,500	—		4	致遠, 靖遠(各2)
	80年式15姆克砲	149.1	4,800	51	530	11,000	12	高千穂, 浪速(各6)	14	定遠, 鎮遠, 經遠, 來遠, 平遠(各2), 濟遠(1), 広甲(3)
	旧式15姆克砲	//	身3,850	34.5	485	4,000	6	比叡	—	
	新式40斤安砲	120	2,647	18.1	461	3,000	—		8	超勇, 揚威(各4)
	12姆比砲	//	3,840	25	467	10,400	4	赤城	—	
	10姆5克砲	105	?	?	?	?	—		4	広甲
	旧式長8姆克砲	78.9	身1,986	通4.12	340	2,400	2	比叡	—	
	12斤後裝安砲	76.2	身1,950	片4.7	357	5,800	—		4	鎮南, 鎮中(各2)
	新式9斤安砲	//	//	//	//	5,500	—		//	超勇, 揚威(各2)
	長7姆5克砲	75	1,795	4.3	?	?	4	扶桑	—	
	短7姆5克砲	//	845	//	?	?	//	扶桑, 比叡(各2)	12	定遠, 鎮遠(各4), 經遠, 來遠(各2)
	金陵製銅砲	?	?	約2	?	?	—		4	濟遠
速射砲	15姆安砲	152.4	6,096	45.4	671	8,600	8	吉野, 秋津洲(各4)	—	
	12姆安砲	120	4,801	18.1	467	7,000	59	松島(12), 巖島, 橋立(各11), 千代田(10), 吉野(8), 秋津洲(6), 西京丸(1)	—	
	12姆克砲	//	3,875	23.8	610	11,000	—		3	広丙
	6斤諾砲	57	2,479	2.72	655	4,500	2	浪速	2	平遠
	57密山内砲	//	2,280	//	600	4,000	1	西京丸	28	定遠, 鎮遠(各2), 致遠, 靖遠(各8), 広甲, 広丙(各4)
	57密保砲	//	//	//	//	//	—			
	47密重山内砲	47	1,881	1.5	611	//	2	西京丸	—	
	47密重保砲	//	//	//	//	3,500	67	松島(5), 巖島, 橋立(各6), 千代田(14), 吉野(22), 高千穂(2), 秋津洲(8), 赤城(4)	20	定遠, 鎮遠, 致遠, 靖遠, 經遠, 來遠, 濟遠, 平遠, 福龍, 左隊1号(各2)
	47密輕保砲	//	1,410	1.12	450	3,000	36	松島(10), 巖島, 橋立(各12), 赤城(2)		
	40密保砲	40	?	?	?	?	—		2	經遠, 來遠(各1)
機砲	37密保砲	37	739	0.51	402	800	—		39	致遠, 靖遠(各6), 經遠, 來遠(各5), 濟遠(9), 超勇, 揚威(各4)
	37密5連保砲	//	//	//	?	?	—		28	定遠, 鎮遠(各8), 平遠, 広丙(各4), 右隊2号, 3号(各2)
	1尹4連諾砲	25.4	1,032	0.2	450	?	31	高千穂, 浪速(各10), 比叡(4), 扶桑(7)	8	超勇, 揚威, 鎮南, 鎮中(各2)
	11密5連諾砲	11	661	?	410	?	4	比叡, 扶桑(各2)	—	
	11密10連諾砲	//	?	?	?	?	8	高千穂, 浪速(各4)	24	致遠, 靖遠, 超勇, 揚威, 左隊1号(各4), 鎮南, 鎮中(各2)
	8密5連諾砲	8	750	?	565	?	10	松島, 巖島, 橋立(各1), 千代田(3), 秋津洲(4)	—	

注 1) 海戦参加時の機砲の搭載数には異説があるが努めて正確を期した。

2) 一般呼称の欄の漢字の読み方は次のとおり。

姆：センチ(センチ), 斤：きん(ポンド), 尹：インチ, 密：ミリ

加：か(カネー), 克：クー(クルップ), 安：あん(アームストロング), 比：ひ(フィブリール), 諾：ノー(ノルデンフェルト), 山内：やまのうち, 保：ほ(ホチキス), 義：が(ガトリング)。なお30姆5は30.5センチの意味。

3) 身長は機砲を除いて鋼鉄砲身の値を示す。

4) 弾丸重量は機砲を除いて鋼鉄砲身の値を示す。ただし通：通常榴弾, 片：片鉄榴弾。

この上陸地点を鴨緑江口の大東溝とする説がある。確かにそれまでの北朝鮮派遣部隊は大東溝に上陸しており、今回は清廷が北洋艦隊に与えた護送命令は目的地が大東溝であった。だが大孤山の方が上陸しやすく、しかも安全だという理由で、にわかに変更された。もっともその後の清廷への報告では、やはり大東溝になっている。

日清両国艦隊は第1表の兵力で海戦に臨んだ。また各艦が搭載していた砲は第2表のとおりである。

隊に所属するのが順当であったが、同艦は当時外国で保甲巡洋艦 (Belted Cruiser) と呼ばれていた型式で、舷側に装甲を備えていたため本隊に加えられた。

西京丸は日本郵船会社からの徴用船である。海軍省は同船を8月11日に雇い入れ、17日付けで横須賀鎮守府所管の巡洋艦代用に定め、西海艦隊付属報知艦とした。戦記物では西京丸をしばしば仮装巡洋艦としているが、この名称は日清戦争当時にはまだなかった。軍令部は同船を戦地に派遣するため、造兵廠用と龍驤搭載の12センチ速射砲各1門を引き上げて西京丸に搭載するように海軍省に求めた。しかし造兵廠のものは火薬の試験砲なので早急な引渡しが困難であり、また龍驤のは操砲練習用で実用不適なため、造兵廠保管の砲身を砲術練習所にあった砲架に載せて、1門だけを船首楼に搭載した。西京丸には9月7日樺山参謀官が乗り込んだが、結果的にはその乗用に徴用されなかなたになった。

北洋艦隊は砲艦操江が豊島海戦で捕獲されて信号書が日本の手に落ちたので、にわかに信号を改正したが、そ



れに慣熟する暇がなく不徹底なのを見て、丁司令は各艦に対して、①艦首を敵に向けるのを基本戦術とし、②同型各艦は協同して助け合い、③常に旗艦に準じて運動する、ように訓示した。上述の隊別はこの②に基づくもので、艦隊区分に相当する。ところが、海戦に臨んだ際の隊形はこれではなく、建制上の組織との混合形であった。

清国の軍制では軍の基本単位を営と呼び、全軍を左翼、右翼、中軍、後軍に分けていた。陸軍の営は日本の大隊に相当し約500人、したがって上述の銘軍8営は4,000人の兵力で、これには馬400頭と野砲80門などが付属した。一方、海軍では軍艦も水雷艇も1隻を1営と定めた。

戦争当時の編制は左翼が鎮遠、来遠、超勇、右翼が定遠、濟遠、揚威、中軍が致遠、靖遠、経遠で、それぞれの最初の艦が中営、2隻目は左翼と右翼が前営、中軍の艦が左営、3隻目は後営または右営と称した。これらの艦が主戦艦隊を構成し、それ以外が後軍に属して軍港防備、練習などに従事した。

ちなみに士官の階級名は上から提督、総兵、副将、参将などで、提督は北洋艦隊司令の職につく。北洋海軍章程に定められた総兵の定員は2名で、両翼の長であると同時に鎮遠、定遠の艦長を兼ねる。したがって定遠艦長の官名は右翼総兵になる。副将の定員は5名で、大型艦5隻の艦長である。たとえば経遠艦長は中軍右営副将、来遠艦長は左翼前営副将で、また揚威艦長は右翼後営参将と、官名だけでどの艦の艦長かを区別できた。

なお第4隊の広甲は広東海軍の所属で、この年の5月に举行された北洋海軍大検閲に参列したまま、東学党の乱でその後も残留させられたものである。

第1表に示す平遠以下は大洋河口の上陸を支援していたため遅れて海戦に参加した艦艇で、建制上は後軍に属していた。

戦闘開始

連合艦隊主力は9月17日(月曜)の朝、海洋島の西方に達した。長官は赤城に同島錨地を偵察させたが異状がなく、午前9時に本隊の陣形を第2図のように三艦群陣に変更し、戦闘教練を実施しながら大鹿島へ向かった。

前夜は風上に電光がひらめき、小雨がばらついたが、夜が明けると「煙

も見えず雲もなく、風も起こらず波立たず、鏡のごとき黄海」が眼前に広がっていた。

その頃北洋艦隊では鎮南、鎮中と水雷艇が大孤山上陸を支援しており、平遠と広丙が大洋河口の浅瀬付近に、残りは大鹿島の外方10裡に第1隊を沖にして以下の各隊が岸に向かって2列の縦隊を組んで停泊していた。丁司令は午前8時銘軍に上陸を督促するとともに、艦隊には旅順に向け正午拔錨を予令した。

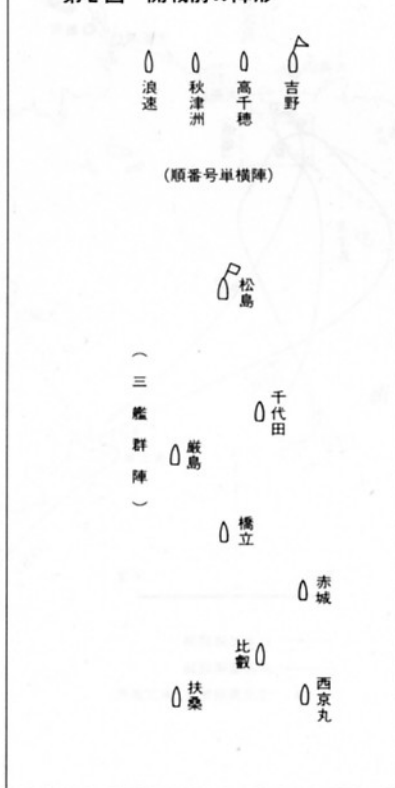
各艦は9時15分から1時間ほど規定の戦闘教練と艦砲射撃を試みたが、それが終わる頃定遠と鎮遠の橋楼の見張りが海洋島方面の水平線上に数条の煙を認めた。

丁司令は定遠の艦橋で艦長、北洋海軍副統領のドイツ人ハネッケン砲兵大尉および副長格のイギリス人タイラーと作戦を協議し、「分断縦列」で応戦することにした。

この陣形は第1～第5隊の各1隻ずつの後方に他の1隻ずつが並んだ単縦陣といわれるが、会敵時の対勢から類推すると、第1隊を中央にしてその前後に第2、第3隊の1隻ずつが並び、先頭に第4隊、最後尾に第5隊を配置した単縦陣のように思われる。

連合艦隊もまた、大鹿島を左舷前方に認める位置まで進んだ頃、吉野が東北東に1条の煙らしきものを発見した。煙は次第に数を増していった。

第2図 開戦前の陣形



11時30分に敵艦隊出現の報を受けると、伊東長官は三艦群陣を解いて単縦陣を作るように命じ、赤城と西京丸を本隊の非戦側(左側)に移し、次いで艦隊速力を10ノットに上げ、午後零時5分各艦を戦闘配置につかせた。

その間に行動を起こした北洋艦隊は、ハネッケンの李鴻章への報告によると双縦陣から単縦陣に移り、次いでラン提督の提案により後翼単梯陣を取ったという。

ラン提督とは定遠艦長のリュウ(劉)か、鎮遠艦長のリン(林)のいずれかはっきりしない。提督(Admiral)といったのは総兵が少将に相当するからである。

タイラーの見聞録では、出港時に掲げられた信号旗が規約に反して横陣であったので、旗艦が中央に位置することになったが、これは定遠艦長が臆病で、自艦が先頭に立つのを好まなかったためだとしている。艦長が長官の命に反した指示を出すことはありえないので、ハッケネンの

報告のほうが正しかろう。

両艦隊の距離が1万メートル以内になった頃、連合艦隊の左舷前方に平遠、広丙と水雷艇が姿を現した。伊東長官はこれを相手とせず、敵の主力と戦おうとして零時18分、第1游撃隊に右方の敵を攻撃するように命じた。だが吉野は命令を主力の右翼を攻撃する意味に解して、その方向へ進んだ。

この運動を見たタイラーは日本側が最も弱い右翼を側面から攻撃しようとしていと察した。これに応じて清国側も右方に転舵すべきであったが、臆病な劉艦長はそれを知りつつしなかった、とタイラーはいう。

タイラーが丁司令に右旋回を進言すると採用され、旗艦にその信号が揚り、やがて降下した。降下は発動を意味するが、劉艦長は転舵を命じようとしな。タイラーが信号が発動されたのに転舵しないと艦隊はますます混乱すると催促したので劉は面舵を令した。しかし小声で「慢、慢（待て待て）」といったので、操舵員は転舵せず、艦は回頭しないままになった。

これにはタイラーもすっかり怒り、丁司令に訴えようとして艦橋にかけ上ったが通訳がおらず、意志を通じることができなかった。

その時、艦橋下の主砲が轟然と1発放った。定遠の艦橋は長らく修理を怠っていたので、発砲の激震によって手摺が折れ、二人はもんどり打って転落したという。

タイラーが非難した劉艦長は、その後の定遠の行動からはそれほど臆病だったとは思えない。

定遠が発砲すると各艦が一斉に撃ち出した。日本側の記録では零時50分、清国側では零時30分とある。

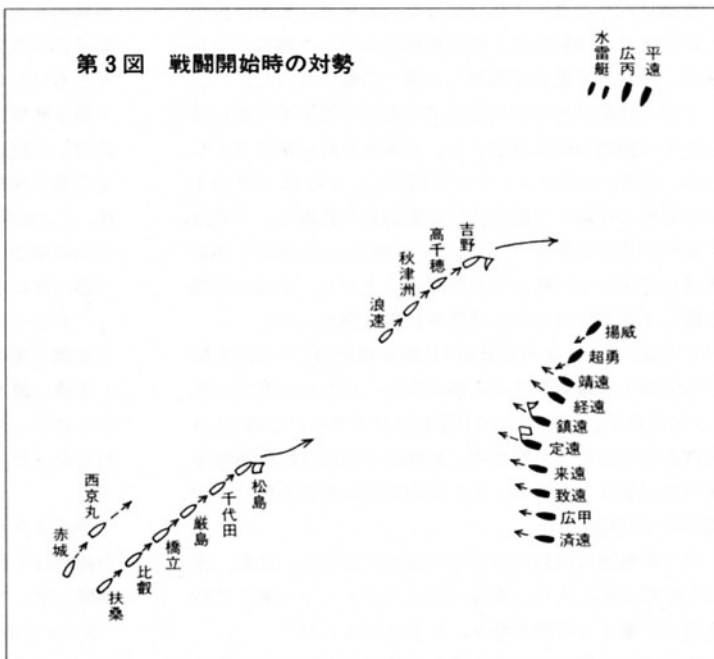
この時点での両艦隊の対勢は、軍令部編纂の「廿七八年海戦史」によると第3図のようであった。

この際の清艦の配列には異説が多く、たとえば第1表の隊ごとに並んだもの、第2隊の2隻だけが左右に分かれたものなど、10通り以上が散見される。もっとも同型艦の艦名の異同を無視すれば4通り程度になるが。

北洋艦隊の配列は中国側の資料によるべきだ、と思われるかもしれないが、たとえば大陸出版の「清末海軍史料」とか台湾の「中国海軍史」は、日本の「近世帝国海軍史要」などをそのまま翻訳して載せたり、あるいはウエストコットの「シーパワーの歴史」その他を引用しており、あまり参考にはならない。

いずれにしても第3図はわが戦史編纂委員が各説を検討し、最も信頼が置けるとして採用したものであろう。

第3図 戦闘開始時の対勢



こうして海洋島と大鹿島の間で4時間半に及ぶ戦闘が繰り広げられることになった。

海戦の概況

砲戦開始距離は清国側が約6,000メートル、わが方が3,500メートルといわれる。零時52分に松島が定遠に向け、3分後に吉野が右翼の2艦に発砲し、1時9分までに西京丸を含めた全艦が射撃を開始した。

第1游撃隊は速力を14ノットに上げ、右翼と旗艦を連射した。1時5分頃超勇と揚威に火災が起こった。

本隊は敵艦隊を常に右正横に見ながら猛撃した。定遠以下も豊島沖の戦敗に報いるのはこの時とばかり、横を衝いてわが陣形を崩そうと、激しく砲撃した。

だが7～8ノットの敵はわが包囲を突破できず、次第に旗艦の運動に従うのが困難になって陣形が乱れ、時には味方の艦がかえって射撃を妨害した。

敵はその間に好目標を見付けた。わが低速艦である。

最初に目標になったのは比叡で、1時14分頃前を進む橋立との距離が1,300メートルに開くと、定遠と来遠が突進してきて衝角戦術を試みようとした。

このままでは衝突を免れないと感じた比叡は、両艦の間を突破して本隊に追い付こうとした。そのため数百メートルから猛射され、大損害を蒙ることになった。

次は本隊殿艦の扶桑である。比叡が満身に砲弾を浴びながら反航戦を乗り切ると、扶桑が衝角戦法の対象になり、左方に回避することができたが、1時20分頃には被弾により火災を生じた。

赤城は列外を進んで孤立化したため来遠、致遠、広甲らに囲まれ、1時25分1弾が艦橋に命中して艦長以下を倒し、わが方で艦長が戦死した唯一の艦になった。

2時に比叡は火災が再発して弾薬の供給が不可能になったので南西方向に避退した。赤城もそれに続こうとしたが、来遠らが300メートルに接近し、2時15分その1弾が艦橋で炸裂して艦長代行の航海長が負傷し、一時は2番分隊長が指揮をとった。だが2時20分赤城の1弾が来遠に命中して同艦に火災が激しく上がり、赤城は危機を脱して蒸気管などの応急修理に取り掛かった。

その間同15分に西京丸が「比叡赤城危険」の信号を掲げると第1遊撃隊がその応援に向かったため西京丸が孤立、定遠以下に追跡され、11発を浴びるうちに2時22分舵機を損じた。人力操舵中に福龍から前後3回の雷撃を受けたが事なきを得た。その後西京丸は戦場を脱し、仮根拠地を目指した。

第1遊撃隊は西京丸の信号を認めて反転し、比叡、赤城と敵艦の間に入り、本隊と約6,000メートル隔てて敵主力を挟撃する対勢を取り、ともに猛攻した。

敵側では、最初に火災を発した超勇が1時半頃大鹿島南西約10海里に沈没し、また同じ方向に逃れた揚威が2時半に同島南々西約6海里で擱座し、火炎を上げ続けた。

この時までには済遠が逃走して広甲もこれに続き、戦場には第1～第3隊の6隻と平遠、広丙が留まるだけになった。だが多くの艦は焼けただれ、甲板上には死体が横たわり鮮血肉片が飛散していた。

3時10分頃定遠に大火災が起けると艦隊は收拾がつかなくなり、各艦は先を争って旅順あるいは大鹿島方面に逃げ出した。

今や、わが本隊に敵対するのは定、鎮、致の三遠艦と水雷艇1隻だけになった。だがこれらの戦意は衰えず、鎮遠は損傷大であったが、よく定遠を掩護して戦った。

3時26分鎮遠の主砲弾が松島で炸裂し、装薬が誘爆して一挙に96人を殺傷した。小学唱歌にもなった「勇敢なる水兵」が生まれたのはこの時である。

致遠は全弾を撃ち尽して吉野に衝突を試みようとした

が猛射を受け、次第に後部より沈下して3時30分ついに海洋島の北東約30海里で沈没し、大部分の乗員が艦と運命をともにした。

第1遊撃隊は逃走艦の追撃に移った。まず旅順方面に逃走した経遠を追い、吉野は4時48分約3,000メートルで砲撃を開始して追い詰め、僚艦も加わって猛射した結果、右に大傾斜し、5時29分右舷艦首よりブルシュール島の東20余海里に沈没した。続いて靖遠、来遠を追って大孤山沖に向かった。

これより先、松島は舵機を破壊されて4時7分長官は不管旗を掲げ、各艦に各個の運動を取らせた。

定遠、鎮遠は無数の榴弾を受けて非装甲部は蜂の巣のようになったが、枢要部は装甲に保護され、戦闘力を失わなかった。だが弾薬が欠乏しはじめ、戦場を去ろうとした。

やがて夕もやが立ちこめ、長官は水雷艇を伴った敵との夜戦は不利と判断して追跡を断念し、5時40分第1遊撃隊に対して「本隊に帰れ」の信号を発した。

同55分赤城が本隊に合した。同艦は応急修理を終えて戻ったのである。6時30分第1遊撃隊が復帰した。

比叡は4時過ぎに消火を終え、本隊の方向へ進みかけたが、夜になれば合同が困難なので4時半頃反転して仮根拠地へ向かった。

8時に長官は旗艦を橋立に変更し、大損傷の松島を呉に向かわせた。

一方、ひたすら旅順へ逃走中の広甲は11時頃大連湾口の三山島に擱座した。

その頃わが艦隊は南下を続けていたが、18日正午頃、比叡と西京丸の消息と敵艦隊の動静を探るため戦場に向けて反転した。その際、赤城は損傷が大きいので仮根拠地へ帰投させた。先行した第1遊撃隊は擱座中の揚威を発見し、千代田が外装水雷で破壊した。

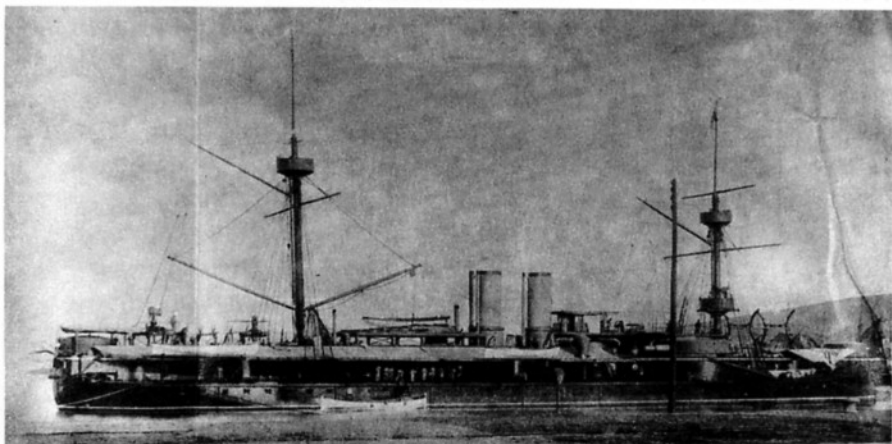
午後6時になっても比叡と西京丸が依然として不明であったが、各艦とも多少の損傷を受けているので、いったん仮根拠地に戻ることにした。

海戦の結末

最初に長山串沖の仮根拠地に戻ったのは西京丸で、18日午前1時15分であった。次いで5時50分に比叡、午後4時46分に赤城が帰着した。その間、呉帰投中の松島と行き合った通信船最上川丸が入港して海戦の勝報をもたらした。樺山参謀官は午後4時半に最上

世界の艦船 1994. 9

清国北洋艦隊の旗艦定遠。



川丸を仁川に送って、海戦の概報を大本営に入れた。ちなみに当時は無線電信がなく、連合艦隊から大本営あての電報は、仁川から陸上線で釜山に送られ、海底電線で対馬經由、東松浦半島の呼子または長崎の電信局が中継して広島あるいは東京へ届けられた。

連合艦隊主力は19日午前8時仮根拠地に投錨し、21日に戦闘詳報を送った。

清国側では旅順に18日午前3時半にまず済遠が着き、夜が明けて広丙、福龍、靖遠、来遠が相次いで戻り、9時半に定遠、鎮遠、11時半に平遠、鎮南、鎮中が入港した。

李鴻章はハネッケンなどの報告により10月5日戦況を清廷に上奏した。李はその中で「中外各將士、日艦3隻の撃沈を目撃せるも諸国の伝聞するところによればなお破損沈没せるものは、この数に止まらざるべし」と述べ、もし済遠と広甲が逃走して隊形を乱すようなことがなかったなら大勝を博していたと断言した。

海戦の教訓

冒頭に述べたように、30年ぶりの海戦は世界中の話題になり、各国海軍は用兵と技術の両面から調査研究を行った。その結論のいくつかを拾ってみよう。

黄海戦勝の要因は指揮、訓練、速力、速射砲などで日本側が優っていた点にあるとされた。

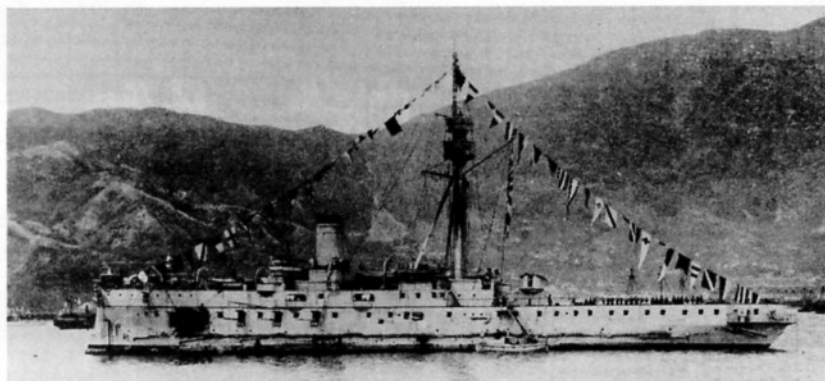
リッサ海戦の陣形とは逆に、単縦陣の日本艦隊が優速を利用して横陣の清国艦隊の回りをかけ巡って勝利を取めたことから、単縦陣が各国海軍に注目された。

特に英海軍がそうであり、中でもフィッシャー提督は艦隊演習の結果1901年に単縦陣を発展させ、丁字戦法が海戦の必勝法だと提唱して敵もまた丁字戦法を取るであろうから敵より優速でなければならないと論じた。

速射砲、特に中口径のものは第2表に示すようにわが方が圧倒的に多かった。清国側の射撃は必ずしも練度が低かったとはいいい切れないが、速射砲の発射速度が同じ口径の通常砲の5倍であり、その結果双方の被弾数は第1表の右欄に示すような差となって現れた。

速射砲の威力を認識した海軍省は海戦から2カ月しないうちに、浪速と高千穂の15センチ克砲を同口径の安式速射砲に換装することを決定し、安社に購入を手配した。速射砲への換装はその後他の艦でも行なわれている。

安式速射砲が勝利に大きく貢献したことと、戦時中の協力により、明治28年5月安社社長のウィリアム・アームストロングに勲二等旭日章、副社長のアンドリュー・



連合艦隊旗艦を務めた松島。海戦後の10月2日、呉における艦影で、艦首左舷の被弾の跡が生々しい。

ノーブルに勲二等瑞宝章が授与された。

ただ47ミリ速射砲は口径が小さすぎて敵に与える損害が不十分だとして明治28年2月、軍令部は当時建造中の戦艦富士、八島のそれを57ミリ速射砲に変更するよう海軍省に求めた。これは保留になったが、拡張計画の戦艦で実行されることになった。

一方、主砲について見ると、わが32センチ砲の発射弾数は松島と橋立が各4発、敵島が5発で、敵の30.5センチ砲は定遠120発、鎮遠97発であった。わが方の32センチ弾は鎮遠と来遠に命中したといわれるが、装甲板を貫通していない。敵の30.5センチ弾は松島以下に多大の損害を与えた。

結局32センチ砲はほとんど役に立たなかったが、この3門があるために海軍が日清開戦に踏み切れたのも事実であった。

わが砲弾は1発も定遠、鎮遠の装甲を貫通せず、装甲の威力が実証された。また防弾甲板は、英仏双方の方式とも艦の浮沈力を失わず有効であった。

敵のほとんどの艦に大火災が発生し、なかなか消えなかった。この教訓から拡張計画艦の注文に際して、造船所に艦内の居室や隔壁などに鋼板を広範囲に使用し、また木材には耐火処理を施すように要求した。

清艦は実装魚雷を発射管に装填し、予備魚雷を迅速に装填しやすいように近くに置いて出撃したが、砲戦が激しくなると被弾誘爆を恐れて目標なしに発射したり、予備魚雷の頭部を外して艦内に格納した。この戦訓により英海軍は戦艦の舷側発射管を水中に配置するように改正した。

反省すべきは海戦の最後に追撃を中止したことである。そのために制海権獲得の目的は達成されなかった。

海戦後大本営は第2軍を編成し、遼東半島に上陸させたが、難行して10月24日から11月17日まで要した。修理を終えた定遠以下の出動が予想され、連合艦隊は警戒を緩めるわけにいらなかった。

定遠を旗艦とする北洋艦隊は明治28年2月まで存在した。ただ二度と連合艦隊と戦う気力がなかったことは、あとになって分かったことである。